

---

< 特 別 寄 稿 >

## ホスピタリティー

西日本旅客鉄道株式会社

執行役員和歌山支社長 森 長 勝 朗

「例えば和歌山の地域経済の展望は？」と聞かれれば、私はやはり観光というキーワード抜きには語れません。当地は海・山あり・温泉ありと自然は言うに及ばず、歴史的文化財には事欠かない処です。しかも京阪神から比較的近接していることもあり、ご承知のように白浜をはじめ南紀エリアはかつて新婚旅行のメッカとして大変賑わったものです。ただ、これは私の父母の時代のことです。今は昔、黙っていても人々が集まる時代は過去のこと。そう考えますと、今、まさに次代の和歌山を展望するときではないでしょうか。腰を現実に据え、和歌山のもつ魅力・和歌山にしかない良さを能動的にアピールしていかなければならないと、いつになく強く思い始めているのです。

時代はあらゆるものを飲み込んで IT の波が押し寄せています。かつては駅と列車の間に駅員の介在が不可欠でした。しかし、IT 時代を迎え、家に居ながらにして切符の予約や決済まで完了することとなり、結果として「個人対列車」、あるいはもっとダイレクトに「個人対座席」の関係へと進化し、今までのように駅や駅員が介在する余地がなくなっていくことが予見されます。

駅は結果的に、周辺地域の拠点として列車に関わることを以外の役割を付加していく駅と、単なる駐車場の二極に分化していくことになるでしょう。

前者に関しては、かつて駅が地域の人の集い行き交う場所であったという歴史に逆らうことなく、周辺地域のコミュニティの場として発展させねばならないでしょう。さらに付加して、そこは和歌山観光の前線基地として情報発信機能をも持つべきでしょう。ここに立ち寄れば、そこから始まる旅のプロローグが色鮮やかに展開されるかのような、そんな情報を提供できるところでありたい、と考えています。

先にも申し上げたとおり、和歌山には集客資源は驚くほ

---

---

ど多くあります。個々についてはそれぞれ魅力があり、僅かに旬を過ぎたものも含め、今もなお潜在力を失わずにいるわけですが、旅行というものに対して、かつてほどの『非日常』の意味合いが褪せてきたことは間違いありません。気軽に何処へも出かけられ、また求めるものがますます高まっていく今日を凝視しますと、個々がバラバラに光を放っていても人の心の琴線を揺るがすには遠く及ばないということが見えてきます。

人を動かす起動点となるためには、如何にすべきなのでしょう？個々の光を更に磨くことと、光を束ねること以外に方法は見つかりません。

磨く：つまり観光地のブラッシュアップと資源の複合が実現されなければなりません。旅館に泊って帰るだけのパターンは過去のものとなっています。泊りが良く日帰りが悪いと思うことから脱し、世の中の消費性向に合わせつつ、『潜在』のなかで今までとはもっと違う体験や『非日常』を提案し、プレゼンして、整えていかなければならないでしょう。和歌山ならではのいいものとその中にホスピタリティーをここかしこに感じさせること。この2つの価値をセットにして『喧伝』していかなければならないと、考えるのです。

束ねる：つまり観光地どうしのアライアンスの実現です。しかし、残念ながらこれに関して和歌山は十分でない指摘されています。白浜が、勝浦が、熊野がそれぞれビジターの引き合いをしているわけではありません。敵は和歌山県内にあらずなのです。訪れる人が順に周遊したくなるように観光地が手を取り合い、無いものを補完しあうようなコーポレートこそが、和歌山に求められていることではないのでしょうか。また、観光に関与する全てのものが他に期待し待つのではなく、自らが目覚め動いていくべきではないのでしょうか。

この内心の強い力をもってすれば、和歌山は21世紀においても色褪せず魅力を発信していくことができると確信するのです。その際、前述の拠点駅は満載の地域情報を発信し、その任を完遂しなければならないことになります。一昨年、和歌山の自然をテーマに南紀熊野体験博が開催されましたが、顕現という視点では、マイナーな感じが否め

---

---

ず、熊野の良さが十分伝わらなかったのではないかと  
思っています。もっとも1年という短期の博覧会ではいた  
しかたありませんが、熊博＝観光地化＝経済貢献と短絡的  
に期待し過ぎたのかも知れません。

奥熊野エリアは日本人のこころの故郷・原点なのです。  
その懐、奥行きも驚くほど深いものであるが故に、直ちに  
多くの来訪者があるべきだとの発想を控え、ゆっくりじっ  
くりと魅力を訴えていくべきではなかったのでしょうか。  
奥熊野のみならず和歌山は、IT化や極彩色・急角度で進  
む文明の渦の中で疲れ果てた人々の心を癒し、そして必ず  
人々が戻って来る場所であることに私は疑いをもちません。  
「奥熊野・勝浦・白浜に代表される和歌山のあらゆるもの  
が有機的に結合することができれば」と、これが私の考える  
和歌山の魅力再編イメージなのです。

理想の話はこれくらいにして、旅行に携わる者として現  
実の世界に思いを馳せねばなりません。今、鉄道のシェア  
は狭まっています。しかし、誰でも何処へでもいつまでも  
自動車で動くのでしょうか？答えは「No」です。少なくと  
も、自動車より鉄道は、地球に人にやさしいものです。一  
方、何分にも重装備の事業であるゆえ長期のスパンを描い  
てこの事業は進めなければならないのです。

旧来鉄道は観光にそして地元の足として温かく見守り、  
育てて頂いてきたわけで、採算のみ考え列車を走らせるこ  
とだけに終始することはこのエリアを任されているもの  
としていささか短絡的との謗りを免れないかもしれませ  
ん。ただ一方で、企業の論理も成立させながら進めること  
も私に与えられた使命と考えています。

同様にして、地域との連帯・地域発展への働きかけも私  
どもの欠かすことのできないもう一つの使命ではないかと  
も思うのです。

そう心に言い聞かせつつ、今後も新たな和歌山の姿を創  
ることと私ども社員の幸福をダブらせながら進んで行きた  
いと強く思っています。